

地域社会の一員としての意識が働くとはどういうことか

～社会的な見方・考え方の解釈から～

明星大学教育学部教育学科 客員教授 泉 長 顯

1 地域社会の“一員”とは

小学校社会科第3学年及び第4学年の態度に関する目標に“地域社会の一員としての自覚を養う”がある。地域社会の一員というのは、その成員というばかりでなく責任を伴うもののようである。地域に住む人間は自らの地域を維持していく存在であり、よりよい社会の実現を求めていく存在であろうと思う。しかし、現実の人間は、こうした地域社会の「形成者」であるだけでなく、地域社会から影響を受けて成長していく存在でもある。

こうした中で、人間のどのような行動や判断をもって“地域社会の一員としての意識が働いている”と言えるのだろうか。自覚の表れであるとする行動や判断の根底に“意識”が存在すると考えているのであるが、学生を対象とした「7年間のアンケート調査」では、地域社会の一員としての意識らしきものが養われているようには見えないのである。

これは、社会科の授業に何らかの問題があるのか、社会の変化が人間個人にもたらす影響なのか、探してみたいと思った。

2 地域社会の一員としての“意識”とは

社会科の態度目標にある“自覚”は“反省”と同義だとされる。即ち、自覚というのは自らが今何を成すべきかを考え、自らが決めることである。欧語では自意識、自己意識という言葉とも同じになる。その考えの根底にあるものが経験であり、“意識”は“経験”と同義と言われる。

筆者の地域では廃棄物の収集が隔週の水曜日になっている。水曜日が過ぎた或る日、集積所でゴミ袋と思われる紙袋に忠告の言葉が貼られていた。「お持ち帰れ」と。忠告の言葉をしたためられた方は、この表現や対応の様子から近所のご高齢の方だろうと思われた。

地域社会の一員としての意識とはこういうところに表れているのではないだろうか。「私の町を汚さないで、あなたにも責任があるのですよ」と言っているようだ。そして、意識というのはこの例のような態度または行動という意味と同じであると考えられる。

さて、この意識または態度・行動というのは、どのようにして身に付くものであるか。一つに学校教育の授業において学び、社会科教育の目標が実現されると考えられ、もう一つは私たちが一つの社会として携わる社会的慣行によって導かれる所作として身に付くと考えられる。後者は社会的構築主義の考え方に近い。

3 地域社会の一員に関するこれまでの研究例は

“社会形成力のねらいとその手段・学習方法”として幾つかの書物に紹介されている。池野範男、佐長健司、片上宗二、唐木清志、西村公孝、門脇厚司がそうである。池野、佐長が社会認識重視型と言われ、唐木、西村、門脇は社会参加重視型、片上をその中間に置くと唐木は言う。この中で唐木は、アメリカにおけるサービス・ラーニングに関するF. M. ニューマンの「参加」論を分析・紹介しているが、学校現場で実践に取り入れ、社会科教育学会で発表・提案する小学校教諭の実践も珍しくない。

ニューマンの社会参加に基づく「公的市民」論に関する論文〔1989. 10月〕では、W. C. パーカーは、現代社会の問題点を次のように論じている(唐木)と言う。

「今日、市民生活の崩壊は明らかである。何が原因でそのようなになったのか、誰にも分からないだろう。……(中略)……もしわれわれの間に公的徳が存在せず、個人的徳のみが存在するとするなら、その時には、われわれを安全にする政治の形態はもはや存在しないことになる。」

この公的徳と個人的徳との拮抗は、現代の「他人と同じでありたくない」感情や「集団に染まりたくない」とする我が国における個人の表現の中にも観ることはできる。

しかし、古典とも言うべき書には、「子供が一人前になるなら、既成の社会秩序の一員ともなる。簡単にいえば全体の一部であり、その分化した部分のひとつである。」(C. H. クーリー)や「個人は、社会がかれに反応するのと同じように、自分自身に反応することができるようになるまでは、かれはほんとうに社会に属したことになる。」(G. H. ミード)などの論がある。

これらの論は、後に述べる学生の“意識”とはかけ離れている面を感じている。身の回りのことに“無関心なのか”と思われるアンケート結果が在るのである。

4 受講者の“地域社会の一員としての意識”を探る

社会科で学んだことは「学生にはどのように現れるか」、この疑問が本実践の発端であった。学生にとって小学校で学んだことの記憶すら期待できないということは承知の上で、知識として残っているかではなく、地域社会の一員としての意識形成に役立っているかどうかを探れないかと考えたのである。

この調査には二つの配慮すべき点があった。一つは全国的に共通の“学習内容”であること、二つには“知識の有無で判定”されない内容にすることである。そこで共通内容として廃棄物の処理を取り上げた。何処でも行われていることであり、処理の方法が異なっても「目的」が変わらない内容だからである。また、知識の有無で判定されないこととは、「どちらが正しいですか」という設問にはしないということである。知っていることと意識されることとは必ずしも一致しないからだ。

そこで、アンケートの内容を「ごみ処理」に限定し、放置された生ごみを見た「私」はこのように「見た」というように自由記述を行わせ、社会科の目標である“地域社会の一員としての”意識が瞬時に働くかどうかを分析しようとした。

(1) 実践の内容

小学校の現場では、一つの単元の学習が終わるとテストを行う。これは、「社会科で教えたことが身に付いている姿」の評価というより記憶の確認に過ぎないと見ている。

第4学年の学習内容に「廃棄物の処理」に関する単元がある。“ゴミの処理と再利用”、“ごみのゆくえ”などであるが、この学習は受講生である大学生には“経験”と成り得ているか、意識として現れるものなのだろうか。このことを探るためにアンケートを作成してみた。

J・S・ブルーナー自身が承知していたという“あらゆる題材(subject)が、どの年齢のだれにも、知的性格をそのままに保って、教えられることが必ずしもできない”ことは前提にして考えていきたい。

アンケートの内容は次の通り。

私たちの町では、生ゴミを出す日は「月曜日の朝」となっています。しかし、Aさんは「火曜日」にゴミを出しました。どうなりますか。

第1回目の調査を終えて、表現の共通性から次のA、B、Cに分類することができた。以後、この3点を分類観点とした。

A：この行為は社会のルール違反だ。迷惑だ。

B：生ゴミは持って行ってもらえない。そこに放置され、カラスが来てごみは散乱し、腐敗による悪臭などで近所に迷惑がかかる。

C：生ゴミは、そのままになる。

アンケートは初等社会科教育法の受講者のみ、前後期とも第1時間目の最初に実施した。データの正確を期すため、筆者が社会科教育連盟の講義資料として使用した平成25年度の分類結果をここに示す。

平成25年4月（前期受講者）

A 10.2%	B2 26.5%	C 63.3%
------------	-------------	------------

平成25年9月（後期受講者）

A 10.9%	B 34.8%	C 54.3%
------------	------------	------------

この割合は、7年間ほとんど変わっていない。延べ870人のアンケート結果である。

受講者は毎学期1クラス45人から56人程度であるが、分類Aは5人ぐらいであり、年度によっては分類Aが1人ということもあった。

平成30年度は受講者174名、A：9.2%、B：42.6%、C：48.2%であった。1割弱のAは、少ないと言えるのか、それとも人間社会とはそういうものなのか。

社会科の授業を担当する者としては、個人的な学生をつぶやきではあるが、「社会科で教わったことが生きているとは思わない」という一言が胸に刺さっている。

（2）アンケート結果をこのように診た

① 観察者A、B、Cの「見る目」の解釈

A：「社会のルール違反」と見る目

この場合は、地域の住民としての心で、この生ゴミを見つめていることが想像できる。観察者本人が地域の人の心に入り込んでいる状態、即ち、自分と住民が一体化し、価値が共有できている状態である。「お持ち帰れ」という地域の人間の心に似ている。

B：「生ゴミはそのままになり、近所の人たちに迷惑がかかる」と見る目

この場合は、観察者本人は“地域という枠”の外に居る。外から地域を眺め、自分とは直接の関わりは無いとする見方であろう。地域の人々の心には入り込んでいない、価値の共有はできていない状態である。ただ、生ゴミを出した人間の存在や地域という集団、或いはその集団を形成する人の気持ちを察することはできるということになる。

C：「生ゴミは、そのままになる」と見る目

この場合は、生ゴミを取り巻く地域という姿が表れないままである。Bが“地域の枠”を意識している状態に比べ、観察者と生ゴミそのものとの関係でしかなく、或る意味では“所有者、地域住民”が意識されない状態であるとも想像する。

② A、B、Cと講義内容の理解との関係

「成績との関係はどうか」と社会科研究関係者から尋ねられたことがある。

関係の有効性は認められない。講義内容に対して最も優れた反応があったと評価した受講者のアンケートは「B：そのままになり、カラスに荒らされ地域の人たちに迷惑をかける」となっていた。ただ、Cからの成績優秀者は見あたらない。

このことに関して、一度だけ、期末試験問題の冒頭に「アンケートと同じ内容」を出した。当時の第1回目の授業を受けていた学生の100%が「社会のルール違反である。」と回答し、公民的資質として恥ずかしい行為だという記述が目立った。

筆者はこの時、思った。『社会科は、答え方を教えているだけなのだろうか』と。

社会科は社会的思考力・判断力を養うとなっているが、この社会的思考力・判断力は、何処でどのようなときに発揮されるのだろうか。テストの時にだけ発揮されるようであれば、社会科の授業に何らかの問題点があると言わざるを得ない。

そこで、小学校社会科の「廃棄物処理」に関する学習は、“地域社会の一員としての意識”形成に寄与しているかどうか、第3学年から第6学年までの児童の反応を観ることにした。

5 小学生に対する「アンケート」の結果

大学生と同じ内容のアンケートを八王子市立S小学校で実施（平成26年5月）させてもらった。結果、6年生と大学生には大差はなかった。5年生もほぼ同値であるが、A、B、Cの他に特徴的な回答が見られた。それは「D：生ごみはそのままになり、係の人に迷惑」というものであった。

① 6年生児童（5年生もほぼ同値：A～10%）

A 12.5%	B 13%	C 29%	D 45.5%
------------	----------	----------	------------

数値的には大学生と6年生児童の間に大差なく見えるが、Dの記述内容を見ると6年生児童には4学年で学習した“ゴミの分別ができなくなる”等の言葉が見られる。ただし、地域社会との関連で考えているとは認められなかった。

② ゴミ処理に関する学習直前の4年生児童

A 15%	B 6.5%	C 9.5%	D 69%
----------	-----------	-----------	----------

第4学年は学習前にもかかわらず、A：15%ということは、4年生にもなると他人の気持ちを察することが可能になってきているということが言える。つまり、他人の心の中に入り込んで考えることができ

るということであり、地域社会のことを考えられる力が備わりつつある段階であると考えられる。本学年の社会科学学習の全体が「地域」でもある。

③ ゴミ処理に関する学習は行わない3年生児童

A 2%	B 2%	C 11%	D 85.5%
---------	---------	----------	------------

第3学年のA、Bがそれぞれ2パーセントであるが、2クラスの中で1名ということである。考えられることは、3年生には“地域”とか集団の共通性とかは捉えがたい概念であるということである。相手の立場に立って考えると、相手の心の中に入り込んで同じ状況に立つと言うことが困難である。ピアジェの言う“視点の移動”の困難性と共通したものが現れている。

そして、3年生児童の結果についてであるが、ほとんど“地域”という概念を持っていないように伺える。3年生児童にとっては、アンケート内容そのものが何を意味しているのかさえ容易には理解できないようだ。

おそらく3年生児童にとっては、他人の心に入って“同じ価値観で見る”ということは困難であろうと思われた。このことから、3年生児童が『地域』を理解し、地域の問題点を探るなどといったことは学習上困難なことであると言える。つまり、地域の一員としての意識なるものはかなり薄いと考えざるを得ない。

この3年生の状況から鑑みて、一つの課題がある。

ブルーナー心理学の諸原理の中に、“問題意識が存在しない相手にいくらものを教え、指導しても、教育効果はほとんど期待できないであろう。”という一説がある。このことからすると、3年生には地域の見えない働き、即ち“組織としての働き”を理解させるということは“いくら教え、指導しても無理がある”ということになる。

さらに第4学年については、ゴミ処理単元の学習の最中に府中市立F小学校でアンケートを実施させてもらい(全13時間計画の4時間終了時点)、結果は次のようになった。

④ ゴミ処理に関する学習を行っている中間での4年生児童

A 30%	B 30%	C 40%
----------	----------	----------

社会との関連で「ごみ」を捉えようとしている	「ごみ」は物質として見られ、社会との関連は薄い
-----------------------	-------------------------

ところで、第4学年では「ごみ処理」単元の学習が“意識”を変えているように思えるが、なぜ、第5・6学年では“社会のルール違反だ”との意識は薄らいでいくのだろうか。

大学生のアンケート結果からは、この7年間でほとんど変化がないと言うことは、学校の授業に於ける学習というのは、《身に付ける》というより、その時点において《理解する》のみになっているのではないかと考えられる。

さらに、小学生にとっては、地域社会の一員の自覚というより、「地域」そのものの理解がどうなっているのかという疑問がある。地域という概念が無く、地域社会の一員を自覚することも無いであろうからである。

6 小学校児童は「地域」をどのように捉えるか

◇ 事例1：3年生が地域を「集団」として捉える姿

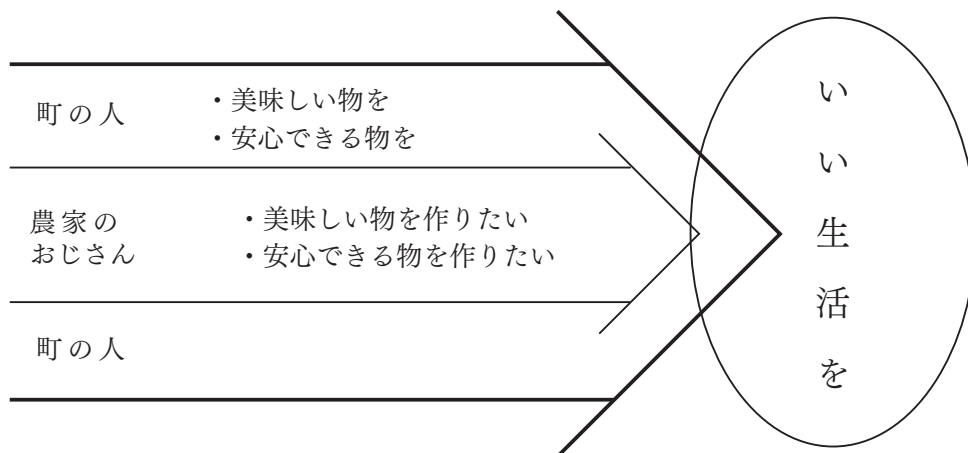
第3学年の学習すべき単元に「農家のしごと」がある。八王子市立S小学校の実践を紹介する。第3学年の児童が「生産者と地域の人間が考えていることは同じである」ということを理解できた事例がある。これは、クーリーの社会組織論に出てくる“野球チームの願いは勝利であり、チームを構成する選手一人ひとは又勝利を目指している”という例に似ている。これが社会であるというのだ。また、ミードの精神・自我・社会の中でも紹介される内容であるが、3年生児童はこうに言う。

『農家のおじさんは、美味しいものを作りたいと思っている。農薬を使わないで、安心できるものを作っている。だから安全だ。町の人たちも美味しいものが欲しいと思っている。そして安心できるものを買いたいと思っている。おじさんと町の人たちが考えていることは似ている。同じ方向を向いている』と。

これは、地産地消を取り上げた授業の一部であるが、同様の価値観を大事にする集団の存在を理解していることになるのではないか。

ただ、3年生児童にとって、農家のおじさんも町の人の中の一人ということまでを言及できたかどうかは定かではない。

もう一つ、この第3学年の実践には大切な指導のポイントがあった。それは「目的」の存在を示したことである。



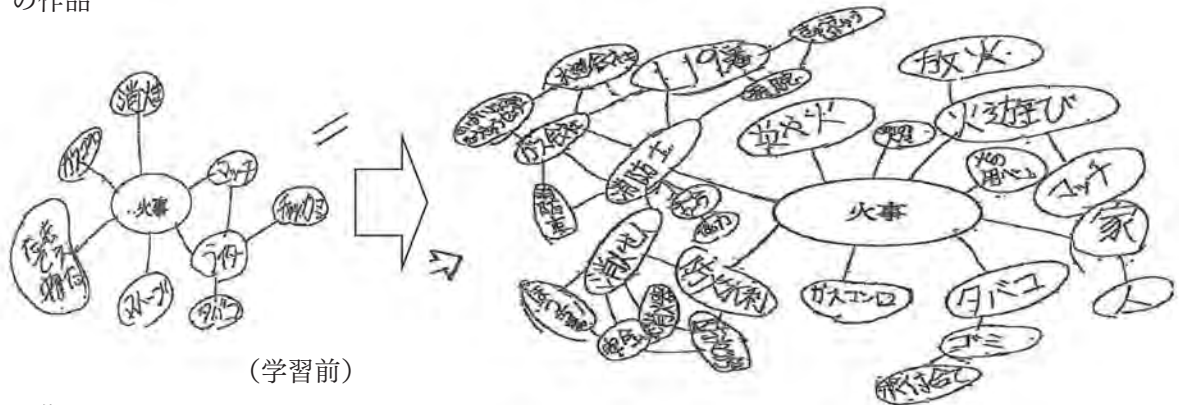
教師は言う。子どもたちに向かって、「そうだね、同じ方向に向いているよ。どんなことに向いているのかな？」と。子どもたちは言う。「いい方向。いい生活」「みんなが喜ぶように」と。

この実践は筆者が参観している目の前で展開された。「いい生活」という目標に向かって「共通」の願いと行動を生み出しているという社会現象を優しい言葉で表現し、地域社会というイメージを子どもたちに描かせたと言えよう。地域を捉える初歩である。

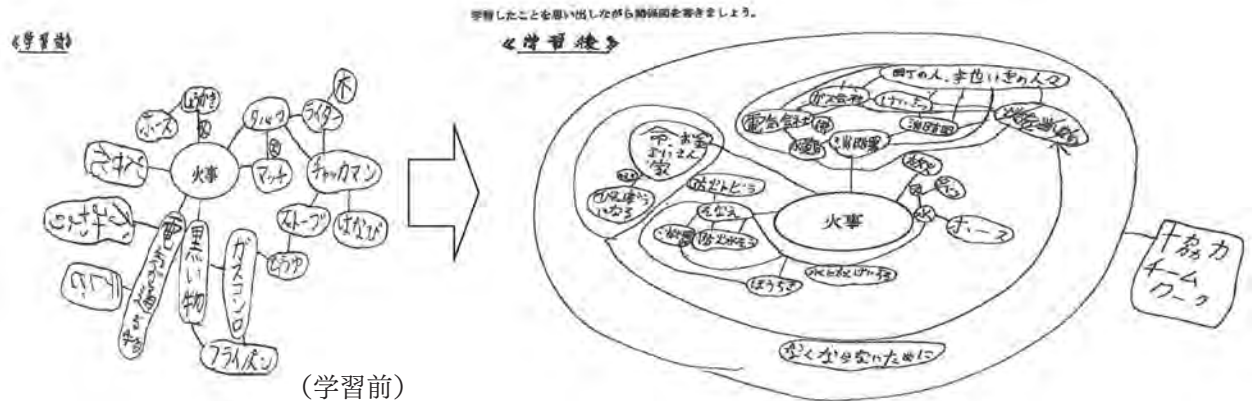
◇ 事例2：4年生が地域の「人々の協力・組織的な働き」を捉える姿

平成29年改訂学習指導要領では、現在第4学年で学ぶこととされている「消防のしごとと人々の協力」及び「警察のしごとと人々の協力」の単元内容は第3学年の扱いに移行し、“人々の協力”即ち“見えない組織の働き”を第3学年で学ぶことになる。その「消防のしごとと人々の協力」を現在の4年生はどのように理解しているのか、次の図を見てみよう。

H 子の作品



M 子の作品



H子の場合、学習前に比べ、多くの知識を習得したように見える。そして「火遊び」や「マッチ」が一つの仲間として繋がっている。だが、「119番」の位置や「消防士」の下方に見える「協力」などから、地域の組織としての働きを理解しているとは言い難い。この図の他にH子は学習のまとめの作文を書いているが、「私は火事に気を付けます。」が最後の文になっている。

M子の場合は、「命、お金、財産、家」が無くならないために協力しているという図を描こうとしている。M子の作文の最後は、「火事を消したり防いだりするためには町の人たちの協力が必要だということが分かりました。」とある。

学級全体の児童の学習反応はかなりH子のタイプが多いようであったが、M子の表現を見る限り、限定された範囲の私たちの町は、その町の人々の知恵と力で守られているということが理解され、4年生の児童にも指導の工夫次第で「見えない組織」の姿も表すことができると思えた。

両者の理解の仕方から言えることは、4年生という段階では徐々に“人間の結び付き”を「目的の遂行」という形で捉えることができるようになってきていることである。人間は目標を定め、その目標を共有し実現を図ることを通して仲間になれるということを概念として作っているのではないかと思われる。

振り返ると、H子の図は、M子の図へと変容する段階的な姿であると考えられる。地域社会という全体像が捉えられないH子には、一つ一つの知識がバラバラに存在し、その知識が全体の中の部分として機能していない。つまり、「安全」を目的として行動する仲間が見えていなかったのである。このことから、指導上は社会が抱く目的の存在を分かりやすく提供する必要があると考えた。

7 “意識”が学習の最中より次第に下がっていくこと

生ごみのアンケート結果では、学習の真っ最中の4年生は「社会のルール違反だ」とする瞬時の判断が30%を超え、6年生や大学生は約10%となった。意識の変化は明らかだ。これは悲観するようなことだろうか。

考えられることは、この6年生も大学生も「月曜日に出すべき生ごみを、火曜日に出すことはどうか」と質問すれば、誰もが「いけない」ことだと回答したであろうことだ。

地域社会の一員としての“自覚”は、自分が今どうすればいいのかを考えることだとすれば、人間個々は色々な考えを持ってもおかしくはない。Aが居たり、Bが居たり、CやDが居るからこそ地域社会なのだとも言える。

人間個人の中では学んだことが必ずしも出来ないということはあるにしても、社会は確実に変化を遂げている。道路のごみである。昭和の時代には、都内の主要道路には車から投げ捨てられる空き缶が散乱していた。だが今はほとんど見ることがない。

社会科の授業は、すぐに子どもたちを変えているのではなく、その考え方が少しずつ少しずつ社会を変え、社会がその慣行をもって子どもたちを変えているのではないかと思われる。意識が行動を呼び起こし、判断の結果として表れてくる。その意識は常に社会の中で培われ働いている。

個性を大切にするという考え方が、服装に現れている。ダメージパンツがそうである。学生たちは言う。個性じゃないですか、と。破いた服もファッションだとは、以前の社会には無かった。こうした風潮、または世相が人間個人の判断を引き出しているのだろう。

学生たちにはこのことと同じように、他人のことには干渉しないという意識が働いているのではないか。地域社会の一員というあり方が変わってきているのかもしれない。

青木秀雄は「洞察力を培う初等社会科教育法」の中で次のように述べている。

「社会を、自分とはかかわりのない向こう側にあるものとして、第三者的に理解して終わりとするのではなく、他の人々と共に自分が生かされている関係として追究して、それを自分の生き方や実践行動につなげていくこと」を社会科の授業で目指さなければならない、と。

アメリカにおける社会科教育の成立史研究にも、社会科はまず子供個々の成長のために行われることがその目的であったとある。そして、社会問題に気づき、社会に貢献できる態度や力を身に付けさせたいとしている。

このことに関して、社会科教育における「社会的な見方・考え方」の取扱いが気になっている。小学校では、「見方・考え方」は社会的な事象をどう見ればよいかという方法として扱われている。これはほとんど事実の取り出し、または収集のための指導に他ならないと考えている。自分の生き方や実践行動につなげていくよりも、書かれた文章や社会現象の理解に指導の重点があるように思えてならない。

子どもたちの経験を深め、判断に資する社会科指導が求められるのではないか。

8 小学校社会科授業の課題として考えられること

社会的な見方・考え方を鍛えていく、それが社会科の指導だと考えられている。しかし、子供には社会的な見方・考え方があるとは、現段階では記述された物を見ない。

社会的な見方・考え方というものを崇高なものとして設定し、子供には無理だとすれば、人間は何時から社会的な見方・考え方ができるようになるのだろうか。やはり、子供は子供なりに社会的な見方・考え方をもっており、その見方・考え方が変化していくと考える方がより教育的ではないかと思うのだが、ど

うだろうか。

小学校社会科は第3学年から始まるが、新しくは消防や警察などの大人社会がいきなり学習内容となっている。青木が指摘する「第三者的に理解して終わりとするのではなく」という意味は、深く社会科の内容に構造的な課題が在るということではないだろうか。

野菜を育てたり、ご飯を作ったりという体験上の学習が難しいのが社会科である。せめて、社会科としての知識を知り、それを分かり、さらにその知識を使うような社会科の授業はできないものだろうか。

知るとは受け入れること、無批判的なことが多い。分かるとは理解すること、そして説明できるようになる。今の社会科はこの段階で止まっているのではないか。使うということが無いのだ。使う、即ち「つくる」こと、創造することだ。社会科は“分かる”で止まる。だから、社会的な見方・考え方を働かせるという意味解釈にも、社会を分かるために働かせるという記述が見られる。

学生が言った「社会科で教わったことが生きているとは思わない」は、一人の個人的な感想とは思えない。

目標の解説をするばかりでなく、小学校の現場に授業の課題を示し、授業の方法を提供するのが大学職員の成すべきことのように思う。

参考図書・文献

- ・北沢方邦「構造主義」114～ 講談社現代新書 1968
- ・V. バー「社会的構築主義への招待 言説分析とは何か」田中一彦訳 川島書店 2002
- ・坪本篤朗 早瀬直子 和田尚明編『「内」と「外」の言語学』117～ 開拓社 2009
- ・森分孝治「アメリカ社会科教育成立史研究」5以降多 風間書房 1994
- ・三嶋唯義編訳（ピアジェ・イネルダ談話・講演記録）「ピアジェとブルーナー 発達と学習の心理学」107～ 誠文堂 1980
- ・G. H. ミード「精神・自我・社会」279～ 青木書店 1992
- ・C. H. クーリー「社会組織論」250～ 青木書店 1991
- ・唐木清志「アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング」101～ 東信堂 2010
- ・西村公孝「社会形成力育成カリキュラムの研究 ～社会科・公民科における小中高一貫の政治学習～」330～ 東信堂 2014
- ・青木秀雄「洞察力を培う初等社会科教育法—知識基盤社会を生き抜くために—」50～ 明星大学出版部 2016
- ・小学校学習指導要領解説社会編（平成20年、29年）文部科学省
- ・中学校学習指導要領解説社会編（平成20年、29年）文部科学省
- ・澤井陽介 加藤寿朗「社会科編 見方・考え方」東洋館出版社 2017
- ・澤井陽介「小学校新学習指導要領 社会の授業づくり」明治図書 2018
- ・原田智仁「今、教科教育の存在理由が問われている」全国社会科教育学会 2015 シンポジウム資料

他